

院長退任のごあいさつ

2023年（令和5年）7月5日をもって理事長と院長を退任いたしました。青山病院に入職して50年、2000年（平成12年）に院長就任後23年、多くの人的協力と激励によって大過なく今日までこられました。改めて、感謝申し上げます。

退任については、感無量と言うよりホッとしたというのが実感です。寂寥感は殆どありません。退任と同時に「名誉院長」なるポストを与えられ、これからも病院のために次期院長を援けて行くことになりました。

短かったような気もしておりますが、静かに思い返せば、次から次へと多くの思い出が蘇ってきます。特に記憶が鮮明な事だけを申し述べたいと思います。

一番周囲に心配と迷惑をかけたことは、何と言っても、1991年（平成3年）に心筋梗塞で倒れたことです。幸いに命は助かりました。「災い転じて福となる」例えの如く、その後、健康に留意するようになり、禁煙もすんなりできました。しかし、同じ年の11月に兄のようにしていた伊藤九十九氏を亡くしたのは痛恨の極みでした。今でも非常に残念に思っています。

最も辛かったことと言えば、創立院長である「青山鍵夫」が病に倒れたことです。約1ヶ月それこそ、眠る時間も十分に取れませんでした。当時、常勤は福山百合子先生と二人だけ。約1ヶ月間、早朝、診察前に病床回診、午前・午後・夕診、そして夜は伊藤徹也先生の往診。眠る時刻は夜中の12時前後といった毎日で体力的には限界に達していました。よく体が持ったものだと思いがちです。30代という若さと主治医であった伊藤徹也先生の熱意、周囲の知人や職員の助けがあったればこそ乗り切れたと思います。

当時は働き方改革などもなく、普段でも日常的に一人二役をこなし、月の半分くらいの当直は当たり前という時代でした。困難な時に無理難題を言う人もいた反面、積極的に協力をしていただいた先生もありました。お陰で、「逆境の時に得た教訓」として人間の本当の心を知ること垣間見ることが出来ました。

また、青山病院に勤務するようになって、5回の建築に携われ、貴重な経験したことも懐かしい思い出です。「創立50周年の全面増改築」の決断、実行できたのもこの時の経験があったればこそ、と思います。建築中、困難なこともありましたが、楽しいこともありました。建設会社、設計会社、および様々な業者の方々と病院の建築プロジェクトチームが毎週会議を重ねて、皆が希望と情熱をもってアイデアを出し合い、一致団結したからこそ成し遂げることが出来たと信じています。

2018年（平成30年）からの2年にわたる建設中のご不便に対し、近隣住民の皆様や患者様の理解、全職員の協力もあり、機能的で耐震性のあるすっきりとした病院が実現できました。

最後になりましたが、院長として常々私が心がけてきたことは「病院の存在価値は地域の皆様からの信頼」と「職員と家族の生活が成り立つこと」です。この二つこそが病院の存在価値であり、院長の務めであると考えてきました。

理事長と院長を退任してからも、自分自身への戒めとしていつも心がけていることは、周囲への感謝と思いやり、そして健康に気を付けることです。そして、「周囲の人の迷惑にならないように生きる」をモットーに残りの人生を過ごせたらと思っています。

幸い、素晴らしい人たちが新たに病院に入職、ご協力していただいています。徐々に新体制が整いつつあります。先の見通しにくい社会情勢や医療情勢の中で、新院長にも今まで以上の難しい判断と舵取りが必要な時代であると思われれます。「不易流行」という言葉があります。病院が存続していくためには、常に時代にあった変化をしていかなければなりません。一日も早く、新院長が職員や地域の人たちの中に根を張った新体制ができるよう見守っていこうと思っています。

”稿”を終えるにあたって、お世話になった多くの方たちに心から感謝申し上げます。

「ありがとうございました。」

2023年7月吉日

医療法人青山病院 名誉院長 青山弘彦